



## 女芭蕉・永松なみ(二)

### 大坂の地で、俳人仲間の支援を得て再起する、なみ

寛保3年(1743)春、旅の俳人湖白浮風こくはくうふうと、家出した中原村なかばらむら(現・佐賀県)庄屋永松万右衛門の妻なみは、どこをどう歩いてきたのか晩秋の頃、ひよつこり京の五条大橋の近くにあった書店の経営者額田正三郎宅に現れます。

正三郎は浮風が若いころ世話になった大坂の俳人野坡ののぼ(芭蕉の高弟)の弟子で、風之ふうしという俳号をもつ俳人でした。時に56歳の老人で、酸いも甘いもかみわけた苦勞人ですが、2人を見てとびあがります。なにしろ不義密通のお尋ね者としての噂が、京にも流れていたぐらいです。

「湖白は人妻をそそのかして駆落ちした極悪非道の女たらしだ」「いや、なみもしたたかなワルだ。夫の万右衛門はなみの首に賞金をかけておる」「面目丸つぶれの万右衛門は、浪人を雇って女敵討めがたきち(当時人妻が不倫した場合、二人を並べて殺しても罪にならぬ定めのこと)を出したそうだ」

真偽不明のこんな話を耳にしていた正三郎は、機関銃のように質問を重ねましたが、2人はなんの弁解もせず、ひたすら頭を下げるばかりでした。

それにしても、なんとみすぼらしい身なりでしょう。汚れて疲れはてた顔、ボロをまとい吹けばとぶような痩せおとろえた姿、いつの間にか正三郎はすっかり同情し、小さなかくれ家のみつけてきて2人を住まわせます。のちに俳人として有名になる湖白浮風の「風」の字は、正三郎の俳号の一字をいただいて感謝の念でつけたものです。

正三郎は九州にいる俳人仲間へいじんちゅうかんに2人が駆落ちしたあとの情報を、ひそかに知らせるよう頼みました。

「なみの父永松十五郎は庄屋の職を辞し、恥じて隠居所にひきこもった」

「なみの妹の縁談は破談になった」「なみの夫永松万右衛門は、妻を寝とられたうすのる庄屋として赤恥をかき、村の子供たちにまでからかわれている」

「なみと湖白が知りあつた学門所丈日堂の経営者、庄屋塩足宇佐衛門しほたりは、奉行所の吟味を受け、あとで砂をかけられたとかんかんに怒っている」などが正三郎の耳に入ります。

正三郎は少しは反省させてやろうとかくれ家を訪れますが、一言も言いたすことは出来ませんでした。

土間のついた三畳一間の小屋に住む2人の貧しさが、哀れでならなかったのです。いや、そうではない。あまりのあなたか暮らしぶりに、言葉を失ったのです。おちぶれながら互いに信頼して慰めあい、いたわりあって寄り添う中年過ぎた男と女の愛情が、俳人風之の胸にジンとくる。不義密通のうしろめたさなど微塵もない。わずかですがと生活費の一部を置いて、正三郎は立ち去りました。

延享2年(1745) 浮風となみは大坂に移ります。恩師野坡は5年前に死亡していますが、門人梅従を中心に蕉風(芭蕉の広めた俳風)は、まだ盛んでした。彼らは湖白となみを歓迎します。

なによりも2人にとって心強かったのは、大坂の風土と人情です。大坂には他国から移ってきた人が多い。他国者だと疑ったりさげすんだりしない繁華な都会です。浮風はかつて病弱な自分を療治するため独学で学んだ医学や調剤法を生かして、医師として生計を立てます。なみも手伝いながら一緒に梅従の主催する句会に出席し、句を発表するようになり、ようやくその才能が認められます。

この時代、大坂俳壇で第一人者といわれたのは、松木淡淡です。彼は芭蕉が死ぬ前年に入門したため、芭蕉の後継者だといふらし、巧みな弁舌と豊かな財力にものをいわせ、「半時庵流」と称した俳風を広め、権力者にこび、富裕者におもねり、上方の大ボスになった俳人でした。あきれるほど豪華な生活を営み、驕慢(きょうまん)(偉そうにして人を馬鹿にすること)といわれた人物ですが、その彼がなみの句を高く評価しています。

「天満参りの帰り 半時庵を訪れて／うぐひすと物いふ枝の雀かな なみ」

「鳳なれや桐も若芽の草の宿 淡淡」

つまり、「何が雀や。あんたは鳳や」と淡淡がほめているのです。

### 盆の月

だまつて通る

人はなし

永松なみ



名月には一月早い盆の月。まだ夏姿の人ばかりであるが、高声で何かおしゃべりしながら通っているのを逆に「黙つて通る人はなし」と表現に変化を見せて軽快な雰囲気を出している一句です。

※「湖白庵諸九尼全集」(和泉書院)の阿部王樹氏の鑑賞を引用させていただきました。